

平成31年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	公益財団法人ニッセイ文化振興財団	
施 設 名	日生劇場	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業	
内定額(総額)	27,132	(千円)
公 演 事 業	27,132	(千円)
人材養成事業	0	(千円)
普及啓発事業	0	(千円)

1. 事業概要

(1) 平成31年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	ニッセイ名作シリーズ 2019 バレエ「ドン・キホーテ」	2019年7月8日～12日	バレエ「ドン・キホーテ」全3幕 出演：牧阿佐美バレエ団 指揮：井田勝大 管弦楽：シアターオーケストラトーカー	目標値	4,936名
		日生劇場		実績値	5,930名
2	日生劇場ファミリーフェスティバル 2019 物語付きクラシックコンサート「アラジンと魔法のヴァイオリン」	2019年7月20日、21日	出演：加来 徹、小関明久、万里紗、玉置孝匡、宮地江奈、小林洋二郎 他 指揮：角田鋼亮 管弦楽：ニッセイシアターオーケストラ	目標値	3,780名
		日生劇場		実績値	4,428名
3	日生劇場ファミリーフェスティバル 2019 パペットファンタジー「ムーミン谷の夏まつり」	2019年7月27日、28日	出演：人形劇団ひとみ座 脚本：長田育恵、演出：扇田拓也、舞台美術：乗峯雅寛 他	目標値	3,497名
		日生劇場		実績値	3,978名
4	日生劇場ファミリーフェスティバル 2019 音楽劇「あらしのよるに」	2019年8月3日～5日	出演：渡部豪太、福本莉子、高田恵篤、平田敦子、川合ロン 他 演出・台本：立山ひろみ、音楽：鈴木光介、振付：山田うん 他	目標値	5,499名
		日生劇場		実績値	6,439名
5	日生劇場ファミリーフェスティバル 2019 バレエ「眠れる森の美女」	2019年8月23日～25日	バレエ「眠れる森の美女」～日生劇場版～ 出演：谷桃子バレエ団 指揮：熊倉優 管弦楽：洗足学園ニューフィルハーモニック管弦楽団	目標値	5,587名
		日生劇場		実績値	7,014名
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価

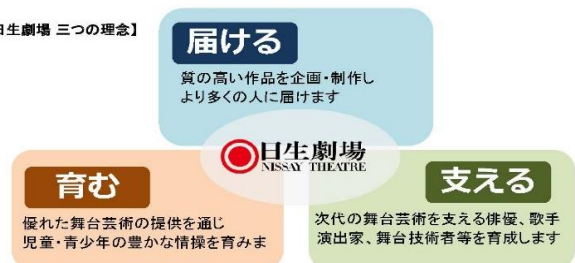
社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

日生劇場は、設置者である日本生命保険相互会社（以下、日本生命と言う）の行う社会貢献活動のうち「児童・青少年の健全育成」「豊かな文化の発展」への取り組みを実現するため、「届ける」「育む」「支える」の三理念をミッションに、舞台芸術の振興と普及に資する事業を実施している。本事業はその中心的位置付けとして、鑑賞機会提供を通じ豊かな社会の礎となる子どもたちの情操涵養に努めるとともに、文化環境の向上も目指すものである。

ニッセイ名作シリーズ 2019 バレエ「ドン・キホーテ」では、当劇場の立地を生かして首都圏の計17校の中高生 5,930名に、オーケストラの生演奏による全幕バレエ公演を無料で鑑賞する機会を提供した。日生劇場ファミリーフェスティバルでは、1都3県の約5,400の幼稚園・小学校で園児・児童に公演を案内する機会を得て、4演目20公演に21,566名と、これまでで最大規模の入場者を迎えた。また5演目中2演目が新制作であり、次代の舞台芸術を担う中堅・若手の出演者・スタッフ等の能力伸長の機会としても寄与した。

以上、本事業は当劇場の社会的役割や地域の特性等に基づいた適切な組み立てのもと、当初の予定通り実施出来たと判断している。

【日生劇場 三つの理念】



助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

当劇場の「届ける」「育む」という理念に照らすと、本事業は幼児・小学生から中高生に、それぞれの年代に見合った優れた舞台芸術の提供（届ける）を通じて豊かな情操を育てていく（育む）ことを目的に継続してきた事業である。

ニッセイ名作シリーズ バレエ「ドン・キホーテ」の入場者数は上述のとおりだが、2015年の第1回以来、これまでの5年間で約25,000名の生徒が鑑賞しており、鑑賞者数の増加からも、関東圏の中学校、高校における本事業の認知度は年々浸透してきているものと思われる。また過去最大規模の入場者数となった日生劇場ファミリーフェスティバルにおいても、多くの自治体や学校・幼稚園等の教育団体の後援により、1993年の事業開始以来、累計39万名以上の方が来場している。これらは新制作を含めた公演内容の質の高さへの信頼とともに、教育関係者が当劇場の理念を支持し、広報活動を支援いただくことで実現しており、本事業の文化的、社会的意義への継続的な評価といえる。

またニッセイ名作シリーズにおける無料招待や、日生劇場ファミリーフェスティバルにおける低廉な価格設定は、様々な環境下の子どもたちに出来る限り広く公演鑑賞の機会を提供するために重要な取り組みである一方、限られた予算の中で公演の質を高めていくためには、助成金をはじめとした収入源の多様化も重要である。当劇場は今後も本事業の発展継続を通じて、若い世代の心を豊かにし、感性豊かな社会づくりに貢献・還元していくことで、引き続き経済的意義にも応えていく。

【参考】過去5年の入場者数推移（単位：名）	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	5年累計
ニッセイ名作シリーズ（バレエ公演）	4,070	5,395	4,449	5,347	5,930	25,191
日生劇場ファミリーフェスティバル	15,961	16,641	17,938	16,059	21,556	88,155

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

本事業は、多様な文化芸術資源が集積する日比谷・有楽町に所在する劇場として、首都圏の広範なエリアの幼児・児童（とその保護者や家族）や中高生を対象に質の高い芸術文化を届け（鑑賞機会を提供し）、これにより子どもたちの豊かな情操涵養に努めるとともに、舞台芸術の向上に向けて、次代の舞台芸術を支える俳優・歌手・演出家・舞台技術者の育成に資することを目標に実施した。2019年度の成果として、3つの観点から報告する。※文中の【】内の数字は当初設定の指標に対する達成度合。

1. 中高生を学校単位で無料招待するニッセイ名作シリーズ バレエ「ドン・キホーテ」

牧阿佐美バレエ団と制作した当公演には、首都圏の希望する中学・高校17校の生徒5,930名【+994名】（入場率96.1%【+16.1%】）を無料招待した。大多数がバレエを初めて観る生徒（アンケート（回収率87.6%）では72%）であるため、有意義に鑑賞できるよう、バレエを鑑賞するポイントや上演内容を説明するDVD教材を事前に無料で鑑賞校に配布するとともに、公演では場面を解説する字幕を表示した。

鑑賞後のアンケートでは、91.4%【+11.4%】の生徒たちが満足したと回答（とても良い、良い、普通、良くない、のうち上位2段階の合計）。引率の先生からも「人間が目の前で踊り、演じ、演奏するその迫力と、人の心、鍛えぬき練習を重ねた大人の迫力、プロの力をこんなに間近で感じられるのが魅力だ。生徒たちの芸術への興味がどんどん高まっているように思う。」など、当公演を高く評価するコメントが数多く寄せられた。

2. 幼児・児童と家族向けの夏休み有料公演 日生劇場ファミリーフェスティバル

1993年にスタートし、累計39万名以上の方に鑑賞いただいている事業で、1都3県の自治体・教育委員会や校長会・園長会から賛同（名義後援）を得て、約5,400の小学校・幼稚園等を通じて保護者の皆様に告知することが出来た。また、より広範に公演情報を周知し、新しい観客を獲得していくため、劇場のウェブサイトやSNSアカウントによる従来の情報発信に留まらず、こまめなプレスリリースの配信、専門媒体への出演者インタビューの掲載、ゲネプロ公開・囲み取材等による公演直前のメディア露出などの多様な広報を展開したことも、入場者数の増加に寄与したものと考えている。

2019年度は、4つの演目でチケット販売数は21,556枚【+3,193枚】（チケット販売率89.5%【+14.1%】、当事業として過去最多）と、大変多くのお客様に会場いただいた。このうち「ムーミン谷の夏まつり」は、厚生労働大臣賞（児童福祉文化賞推薦作品）を受賞した。

3. 次代を担う舞台関係者の起用

当財団では、2019年度も各作品において、以下に代表される、我が国の舞台芸術の次代を担う中堅・若手のキャスト、スタッフなどを起用した。

アラジンと魔法のヴァイオリン	指揮：角田鋼亮	歌手：宮地江奈（ソプラノ）
ムーミン谷の夏まつり	脚本：長田育恵	演出：扇田拓也 演出助手：稲葉賀恵
	舞台監督：蒲倉潤	
あらしのよるに	演出・台本：立山ひろみ	音楽：鈴木光介 振付：山田うん

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

事業期間は、首都圏エリアに居住する児童・青少年向けの公演として適切な時期を設定すべく、中高生向け無料招待公演であるニッセイ名作シリーズ バレエ「ドン・キホーテ」については、学校行事の調整が比較的行きやすいと思われる7月に、幼児・児童と家族向けの夏休み有料公演である日生劇場ファミリーフェスティバルについては、子どもたちが来場しやすいと思われる夏季休暇期間の7月下旬～8月に計画し、予定通り実施することができた。後者については、出来れば事業費との関係で入場者数（チケット販売数）を増やすべく全演目を3日／6回公演としたいところであったが、夏休み期間中とは言え、保護者の勤務日となる平日は土日に比して集客が困難であり、券売を考慮した結果、現状（4演目のうち2演目は土日のみの4回公演）の公演数となった。引き続き、より魅力的な作品作りに努め、公演数の増加を目指したい。

実績として、当初目標を上回る多くのお客様に来場いただくことができたことから、事業期間は適切であったと判断している。

※助成対象事業入場者数	計 画	実 績
	23,299 人	27,496 人 *学校招待者数+チケット販売数

事業費については、児童・青少年に対し、一線で活躍する歌手や演奏家、プランナーなどが参画する本格的な舞台を届けるという目標を満たすために必要な制作費をかけながらも、より効率的な執行に取り組んだ。

予算作成時には、事前見積もりの取り寄せや各演目の特性（初演・再演や舞台規模等）を考慮し、実効性・実現可能性の高いものとなるよう演目ごとに精緻に積み上げ、予算を策定した。また、執行時には、予算超過することなく適切に事業を遂行できるよう、タイムリーに予算執行状況を確認し、必要に応じて計画や執行の見直しを行った。

これらの取組の結果、当初予算より事業費・収支負担金を低減することができた。入場者1人当たりで見ると、入場者数が目標を大きく上回ったこともあり、対象公演計で制作費は6,000円（予算は7,200円）、助成金収入前の収支負担金が2,600円（予算は3,600円）となった。

以上の通り事業費については適切であったと判断しており、今後も公演品質を落とさない範囲での更なる効率性向上を目指したい。また日生劇場サイズで本格的な公演を新制作し、ファミリー向けに低廉な価格で上演する以上、毎回一定規模の収支負担額が生じることから、今後も各種収入の増加に努めるとともに、関係各所には必要に応じて、予算・決算での精緻な内訳をもって説明責任を果たしていきたいと考えている。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当劇場は開場当初より半世紀以上、質の高い舞台芸術を届けることで児童・青少年の情操涵養に資する事業を継続してきた。これは設置者である日本生命による社会貢献活動の一翼を担う取り組みであることと同時に、多くの劇場が集積する日比谷において上演するにふさわしい質の演目を制作し続けてきたことで、お客様、出演者やスタッフ等の舞台関係者、国・自治体や民間助成団体等から広く支持され、支援を受けることで実現してきたものである。特に開場翌年の1964年に開始したニッセイ名作劇場は、これまで累計で約795万名の児童・生徒を招待してきた。ニッセイ名作シリーズと名称を変えた2014年以降は、日生劇場の制作するミュージカルやオペラ、クラシックコンサートやバレエなど様々なジャンルの作品を子どもたちに提供している。日生劇場の文化拠点として最も重要な財産は、これら事業を長年にわたり継続してきたことにより培ってきた多くの人たちの理解や支えであると考えている。

このような歴史的背景も踏まえ、日生劇場では主催するオペラやコンサート、演劇等において本物の（質の高い）舞台芸術の制作体制を維持・向上していくため、アートマネジメント人材からなる企画制作部を配し、自主制作公演の芸術的なクオリティを担保している。また、上演に際しても舞台技術面での演出効果を最大化出来るように自前の技術部を配置している。（(5)「持続性」にて詳述）

2019年度の本事業では、5演目のうち2演目が創作初演、1演目が自主制作作品の再演となり、且つ創作初演と再演の2演目は当劇場での上演後に、全国各地で巡回公演を行った。

創作初演となった一つ目の音楽劇「あらしのよるに」は、絵本作家きむらゆういち氏の人気絵本を原作に、演技・身体・音楽・美術・照明など、舞台の構成要素を等価に捉える多面的アプローチが特徴の立山ひろみ氏を脚本・演出に迎えた。振付に多彩なジャンルのアーティストとコラボレーションを行うなど、国内外で高く評価される山田うん氏、音楽・演奏に時々自動のメンバーでナイロン100℃の公演などでも音楽を担当する鈴木光介氏と、注目のクリエイターたちが作品の中核を成した。原作のシンプルで力強いテーマやメッセージ性をストレートに伝える脚本に、吹雪や風雨などの自然現象を俳優の身体を用いて表現する舞台ならではの手法を取り入れ、幼児から小学生まで、年齢層に見合った受容が出来る作品となった。

二つ目の「アラジンと魔法のヴァイオリン」は、演劇とクラシックコンサートを融合した日生劇場オリジナル形態の公演である。フルサイズのオーケストラによる本格的なコンサートながら、初めて劇場を訪れるファミリー層を意識して、クラシックから派生したバラエティ豊かな楽曲を演奏するだけでなく、子どもが集中力を切らさないよう、舞台俳優やオペラ歌手などによる本格的な演劇要素を取り入れ、芝居（物語進行）に沿って音楽を紹介するなどの工夫をしている。このコンサートは今回で13回目となるが、過去に一度、改訂再演はあったものの、毎回テーマを変えた新作を上演しており、今年度は演出に栗國淳、作曲・編曲に加藤昌則、指揮に角田鋼亮を迎えた。

これら2演目とも目標を1割以上上回る入場者を得たほか、2017年に新制作した人形劇「ムーミン谷の夏まつり」の再演には、初演時を638名上回る3,978名が入場するなど、日生劇場の企画・制作する作品の内容やクオリティを信頼いただいていることの証左と考え、今後も公演制作にあたっていく。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

2019年度はニッセイ名作シリーズ、日生劇場ファミリーフェスティバルの両事業ともに集客が好調で、目標を上回る入場者数（達成率 118%）を得ることが出来た。また、観客アンケートで捕捉する入場者の公演満足度では、前者で 91.7%、後方で 90%の方に評価（とても良い、良いの上位 2 項目の選択率）いただいている。これは設置者である日本生命の社会貢献活動とも合致する直接的な成果であると同時に、劇場集積地である日比谷において子どもたちのために質の高い公演を続けていることへの信頼は、直接の入場者だけでなく、当劇場の貸劇場公演や周辺劇場の公演を含め、この地域全体の舞台芸術の振興に寄与していると考えている。

本事業に関連して、2018年度に引き続き、隣接商業施設を中心とする日比谷地域をあげた日比谷フェスティバルにおいて、屋外ステージでのミニコンサートや絵本の読み聞かせ、紙芝居など、日生劇場ファミリーフェスティバルのコンテンツを提供し、地域一丸となって舞台芸術の振興に取り組んだ。また地元自治体である中央区や港区においては、区民サービスの一環として本事業のチケット購入（及び購入補助）が行われたほか、有楽町駅前に店舗を構えるビックカメラや京急ストアにおいて顧客向けキャンペーンに利用いただくなど、自治体から民間企業まで、本事業の価値を認めてくださる関係先が増えてくるなかで、当劇場だけではリーチできない新しい層への訴求や地元地域の住民への芸術振興につながってきていると考えている。

更に 2019年度も、日生劇場ファミリーフェスティバルで上演した 2 演目が、その後に全国各地で巡回上演を行った。「アラジンと魔法のヴァイオリン」は、一般有料公演として名古屋、福岡、高松の 3 都市で、また当地の小学生を学校単位で招待するニッセイ名作シリーズ公演として上田、飯塚、三原の 3 都市で上演。「ムーミン谷の夏まつり」は、一般有料公演として西宮で上演後、ニッセイ名作シリーズ公演として大分、富山、高知、大東、広島、太田、沼津の 7 都市で上演した。

各地の劇場・ホールにおいて日生劇場の作品を上演するこの取り組みは、当劇場の「届ける」という理念にそって本事業で制作した作品を有効に活用出来ると同時に、各地の劇場・ホールにおいても、子ども（ファミリー）向けコンテンツの充実という課題を解決し、当該地域の芸術文化の振興にも寄与し得るものであるため、今後も全国各地の劇場・ホールとの連携を深めながら、可能な限り拡充し、継続していく。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

当劇場の舞台芸術事業は、大きくは ①本事業（今回の助成対象事業）、②オペラ公演の企画・制作・上演（年2作品で各一般有料公演と中高生の無料招待公演）、③各地の劇場に当劇場制作作品を巡回上演する全国公演（一般公演と児童・生徒の無料招待公演）の3種類に系統立てられる。当劇場の社会的役割を果たすため、各事業は相互に補完し合う関係にあり、特に本事業の成否、並びに持続性はその作品を各地に巡回上演する③の事業の成否、持続性にも直結する。従って本事業の実施が、単に翌年度以降の本事業の改善のみならず、当劇場組織全体の持続的発展の重要な要素ともなっている。

当劇場では、本事業の実施後に制作担当者と経営幹部による「評価会」を実施し、公演の振り返り、評価を行っている。評価会に際しては、参加メンバーを含む劇場職員が事前に統一的な「評価シート」で公演の評価を行ったうえで、その結果をもとに議論を進め、興行面の成績や芸術的品質を総括評価だけでなく、演目選定、演出を始めとした各プランナー、キャストのパフォーマンスと言った要素ごとに評価し、それを次年度以降の本事業運営に活かすPDCA運営を行っている。また、設置者である日本生命に対しては、公演視察とともに、適宜実施報告を行い、持続的サポートへの理解を求めている。

本事業を含むすべての主催公演の企画・制作においては、制作過程を適切に管理する専任のアートマネジメント人材が、またその上演にあたっては舞台技術、劇場運営の専門人材が不可欠である。アートマネジメント人材は5名、平均経験年数10年と現在は世代交代の時期にあるが、その経験不足を補う意味でも芸術参与（オペラ演出家の栗國淳）を配置し、本事業の企画・制作を通じて各職員の専門性を高める努力を行っている。舞台技術も同様に専門の技術部職員（18名、平均経験年数19年）を、また劇場運営に当たっては施設管理、案内業務を専ら担当する劇場部職員（11名、平均経験年数21年）を雇用しており、地域を代表する劇場として恥ずかしくない高度な専門性で本事業をはじめとする公演事業を支えている。 ※舞台技術については一部業務の外部委託、案内業務についてはアルバイトも活用している。

これらの職員の育成は基本的には本事業（ほか）の実施を通じた現場でのOJTが中心となるが、時に外部からのスタッフや、あるいは地方公演における現地スタッフとの交流を通じ、スキルアップを図っている。また、組織としてのノウハウの継続性を維持するために、その年齢、経験構成が偏らないように、退職者の補充の機会を捉えての職員構成の最適化に努めている。また上述の③事業では、各地の劇場からの要望を踏まえた効率的な巡回計画の策定・実施とともに、コスト管理等を行う専任職員3名（全国公演部）を配置し、前掲の通り相互に補完し合う当劇場の舞台芸術事業の持続性を担保すべく組織体制を整えている。これらの専任人材の大半は期間の定めのない正規雇用職員（正規雇用率89.2%）であり、それら職員の長期的視点での人材確保、育成には本事業の継続的実施（＝持続性）が不可欠である。

事業費の面では、設置者である日本生命からの寄付金・協賛金、自治体・民間の各種補助金・助成金の収入に加え、本事業（1のニッセイ名作シリーズを除く）からの入場料収入が大きな収入源となっており、そのいずれが欠けても当劇場の組織活動は持続出来ない。逆に言えば、本事業の存続ゆえに、寄付金・協賛金等も継続的に獲得出来ており、本事業はまさに当劇場の組織活動全体の持続性に不可欠な事業と言える。

上述の通り、本事業を通じて、人材面、財務面での体制整備を図り、またその体制を通じて本事業（＝当劇場の組織活動）の持続性が担保されると言う、プラスの連鎖を作り上げている。